
キミに続く

深山 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミに続く

【Nコード】

N0415Y

【作者名】

深山 奏

【あらすじ】

現代 / 幼馴染 / 高校生 / 切ない / 全年齢OK / ほのぼの / BL ぎみ /

ある日、幼馴染から「自分は養子」だと打ち明けられ、二人で生みの親の家を訪ねる話です。

HPにてUPしています。

車窓の外を流れていく、夕暮れに染まる田園風景。

鈍行列車に僕たち意外の人はいない。

来るときも同じだった。僕は緊張している雪博を和ませようと思つて、でも結局言葉が見つからなくて、

「こんなんで、会社、大丈夫か？」

なんて、どうでもいいことを口にした。鉄道会社が潰れようが、列車が廃線になるうが、僕にはぜんぜん関係ないし、興味もないのに。

今日、僕たちは学校をサボって、いつもとは逆方向の電車に乗った。

「ついてきてくれ！」

朝、駅で顔を合わせるなり、雪博が僕の腕を掴んだ。その切羽詰まった顔に、僕は思わず頷いていた。なんで、とか、どこに、とか聞く余裕はなかった。

何度か電車を乗り換えて、そのたびに、景色からビルが減って田んぼが増えていく。

一時間に一本しか電車が来ない、なんてありえない駅のベンチで並んで座って電車を待っている時、雪博がぼつんと言った。

「俺、養子なんだってさ」

「ヨウシ？」

僕は頭の中で上手く漢字変換ができず、聞き返す。

「実の子供じゃないってこと。俺だけ血が繋がってないんだって」
雪博の家には雪博の弟と妹がいる。ってことは、下の二人は親と血が繋がってるってことか。

そんなの今時珍しくもないし、気にすることないじゃん。って、他のヤツなら笑って言えたかもしれないけど、雪博には言えなかった。

「……………」
「ウチ、この間オヤジがリストラになったじゃん？ それで生活苦しくて…………俺、もしかしたら元の家に帰されるかも。っても、元の家なんて…………」

雪博は力なく笑って、

「知らねえつての」

小さな声で吐き捨てた。

「……………」

ウチに来いよ。

僕が大人だったら、絶対そう言った。でも僕はバイトもしてないし、部屋だって兄貴と二人で使ってるし、家だって裕福ってわけじゃない。

「だからさ、なんていうか下見？」

雪博がおどけてみせる。

笑顔、引きつってるつての。

「…………腹、減らない？」

「お前…………人が真剣に話してる時にそれかよ…………」

「だって朝食べてないし」

「俺だって食ってねえよ。つうか、お前いつも食ってねえじゃん。」

今日だけそんな話すんなって…………チツ」

雪博は舌打ちすると、何かを思い出したように鞆を引き寄せ、中を漁った。教科書とノートを出して僕の膝に乗せていく。持ってる、ということらしい。

「なに？」

「ちよつと待てつて…………あ、あつた、あつた」

雪博は鞆の奥底から一人分に小分けされたクッキーの袋を取り出し、僕に差し出す。

「ん」

くしゃくしゃに皺の入った袋は開けなくても中のクッキーがポロポロなのが分かる。

雪博は僕の膝に置いた教科書とノートを鞆の中に戻しながら言う。「食えば？　一昨日もらったやつだから大丈夫だぜ、たぶん」

「たぶんって……。そもそもそういう問題じゃないんだけど……」
ホントはお腹もすいていなかったし、「バニラ味」なんて書いてある、いかにも甘ったるそうなクッキーを食べる気分でもなかったけど、僕はクッキーの袋を開けた。

開けた瞬間、強烈なバニラの甘い匂いがした。僕はわずかに顔を顰めて、まだ粉になっていないクッキーのかけらを口に運んだ。

「甘……。雪博は？　食べる？」

クッキーの袋を差し出すと、雪博は首を振った。

それっきり僕たちの間に会話はなくなった。僕は時々、思い出したように粉になったクッキーを指で摘んで口に運ぶ。その間、雪博は僕の隣ぼんやり景色を眺めているだけだった。

空は馬鹿みたいに晴れていて、風は嫌味なくらい気持ちがいい。なのに、なんでこいつは自分の家だと疑いもしなかった場所から追い出されようとしてるんだろう。

一両編成の年代物の電車が着いて、僕たちはそれに乗りこんだ。僕たち意外、誰も乗っていない。

雪博の表情が硬い。当たり前か。

「……こんなんで、会社、大丈夫か？」

「さあな」

雪博は向かい合わせになっている座席に深々と座りながら答える。僕は足がぶつからないように、雪博の斜め前に腰かけて、窓の外を見た。

「たぶんここから七つか、八つ先。　駅ってどこ。着いたら起こして」

雪博は壁に凭れると、腕を組んで目を瞑った。

寝るなんて言っても眠れないのは一目瞭然で、雪博の体は強張っていた。いつもなら僕もからかうんだけど……。

「分かった」

僕は答えて、ぜんぜん減らないクツキーの小袋にまた指をつっこんだ。

電車が動き出して、稲の刈り取られた枯れ草色の田園風景が続く。日本の原風景の見本みたいな。

このままどこか、ぜんぜん違う場所に行けたらいいのに。養子とか、進路とか、学校とか、何にも考えなくていつも笑ってられる場所に。

『次は 駅。 駅。』

聞きとらせないために言ってるのか思うほど不明瞭な案内放送が聞こえてきて、僕は雪博を見る。体の緊張はぜんぜん取れてない。

「次だって」

僕は雪博の足を軽く蹴る。

「……何だ、もう着くのか。あゝあ、眠い……」

雪博はわざとらしく大あくびをして伸びをした。

駅は無人駅で、僕たちは手の中に残った切符をクシャリと丸めて駅前に捨てた。こんななら、一駅分の切符買えばよかった。けっこう高かったのに。

雪博が携帯の地図で場所を確認して、僕たちはそれを見ながら土の道を進んだ。途中で腰の曲がったおばあさんに会って、雪博の本当の親が住んでいるという家の詳しい場所を聞いた。

着いた先は、昭和初期、みたいな平屋。立派な門があって、広い庭があって、松の木が植わっていて、敷石が置いてある。玄関扉は引き戸で、チャイムのボタンも二世代前みたいな、黄ばんだボタン。………

雪博は玄関の前に立ったまま、チャイムを押すのをためらっていた。

僕は、そんな雪博の背中を黙って見つめていた。雪博が帰りたいなら、このまま帰ったっていい。

「なんか用かい？」

背中から変なアクセントで声をかけられ、僕たちは飛びあがった。

「ウチになんか用かね？」

振り返ると、人のよさそうな顔をした小柄なおばあさんが立っていた。戦争映画に出てくるモンペみたいな格好で、履いてる長靴には泥がついていた。

「……………」

僕はなにを言えばいいのか分からず、雪博を見る。でも雪博も僕と同じように困っていた。まだ心の準備ができていないんだ。

「ありゃあ、もしかしてあんた雪博かあ？」

「え！？ あっ……………そう、です」

上手く誤魔化すことができずに雪博は簡単に認めてしまう。

「あああ、そうか、そうか。よう来たなあ。若い人が喜ぶようなもんはなあんもないけど、遠慮せんと上がってけ」

おばあさんはガラガラと引き戸を開けて家に入っていく。

鍵、かけてないんだ……………。

「上がれ、上がれ」

おばあさんが顔全体で笑う。

僕たちは顔を見合わせた後、

「まあ、ここまで来たんだし……………」

「雪博がいいなら、僕は……………」

「お邪魔します」

「僕も、お邪魔、します」

玄関で靴を脱いだ。

結果から言うと、雪博の両親はすでに亡くなっていて、今は父方の母親、つまりさっきのおばあさんが一人でこの家に住んでいた。

僕たちはぎこちない仕草で仏壇に線香をあげて、手を合わせて、おばあさんの作ってくれたかりんとうを食べた。

おばあさんは、たくさん作ったからと、赤の他人の僕にまでかりんとうを手土産にくれて、僕たちを駅まで送ってくれた。

僕たちは道も分かるし、二人で帰ると言っただけで、せっかく来てくれたのだからもつと話がしたいと、おばあさんは駅までついてき

た。

おばあさんの速度に合わせてゆっくり道を歩いているとき、雪博が雪博の父親の若い頃にそっくりだという話を聞いた。おばあさんは一瞬息子が帰ってきたのかと思ったそうだ。

「ありがとございました」

「お礼をいうのはこっちのほうだ。またいつでもおいでえ」

おばあさんは目を潤ませて雪博の手を握った。それから僕にも同じようにして、

「これからも雪博と仲良くしてやってね。遠慮せんといつでも来てねえ」

と何度も頭を下げてくれた。

一時間に一本しか来ない電車がやってきて、僕たちは電車に乗りこむ。今度の車両は両サイドに長い椅子が備えつけられている、見慣れた車両だ。

電車が動き出して、おばあさんが淋しそうな顔で手を振る。

僕たちは行儀の悪い子供みたいに座席に膝立ちになって、ガラス越しに何度も手を振った。

おばあさんの姿はすぐに見えなくなっただけど、おばあさんはまだ僕たちに手を振っているような気がして、雪博も僕もしばらく 駅 のほうを見つめていた。

雪博が膝立ちをやめて、椅子に座り直す。いつもは少し窮屈そうに折り曲げている長い脚も今はゆったり通路に投げ出して。

僕も座り直して、標準サイズの足を投げ出す。人がいないとゆったり座れて楽だ。

「いい人そうじゃん」

「……………だな」

それっきり僕たちは黙ったまま来たときと同じ景色を見ていた。でも茜色に染まつた田園風景は来たときとはぜんぜん違つ風景に見えた。

緊張してた雪博も今は体からすっかり力が抜けて、意識をどこかに

忘れてきたみたいにぼんやり外を眺めている。本当の親が死んでいることを知って悲しんでいるようでも、おばあさんに会えたことを喜んでいられるようでも、これからのことに頭を悩ませているようでもなかった。

雪博は空気になったみたいだった。

「なに、考えてる？」

車窓の外に視線をやったまま声をかける。

「なにも」

答えた後で、雪博はしばらく考えて、

「なんか上手く説明できない」

落ち着いた声で言った。自分の生まれた町の空気に自分を溶けこませるみたいに、町の空気を全身に覚えこませるみたいに。

「そうなんだ」

僕が言うと、雪博は幼稚園児みたいに小さくこくんと頷いた。

僕たちはまた黙って、車窓の外を流れていく景色に見やった。

単調な電車の音が心地いい。

雪博がなにを感じてなにを考えているのか、僕には分からないけど、僕はこの風景を覚えておこうと思った。おばあさんのしわくちゃで節の曲がった柔らかくて温かい手や、かりんとうのほのかな甘みや、刈り終わった後の稲や湿った土の匂いや、土道の感触や、僕たちの街よりずっとずっととずっとと高く澄み切った空の色なんかを、全部。

椅子の上に投げ出した僕の手には雪博が手を重ねる。

僕は手を引っくり返して、雪博の手をそっと握った。すると雪博が僕よりもほんの少しだけ強い力で僕の手を握り返した。

「ついてきてくれてサンキュウな」

「いいよ別に、このくらい」

いつでも言って、と続けそうになって、僕は言葉を飲みこんだ。

二度目はないような気がしたから。

それからしばらくして、雪博はおばあさんの家に引っ越した。高

校も向こうの農業系の高校に編入するそうだ。

雪博のおばさんとおじさん　雪博の育ての親　も弟も妹も、家族中でテレビのホームドラマみたいな展開を繰り広げて雪博を引き止めたけど、雪博は最後まで首を縦に振らなかった。

「戸籍は移してないから、家族なんだけどな。育ててもらった恩みたいなのもあるし、返していきたいと思ってるけど、ばあさん一人にしとくのも、ちょっとな……」

そう言っただけで笑った雪博は僕よりもずっと大人に見えた。

「あつちに行く前は、ただ血が繋がってるってだけの他人だろって思ってた。ほら、そんなことわざだが慣用句だか、あるじゃん。でもなんかばあさんに会って変わったっていうか……自分でも変だなんて思うんだよな。ただDNAが他の奴よりちょっとだけ同じってだけなのって」

「遊びに行くよ」

おばあさんも遠慮しないで来いって言ってくれたし。

「おう。俺も。たまにはむこうにも帰んねえと、あいつらもへソ曲げるし」

雪博が苦笑いする。僕も同じように笑って答える。

「それ、あり得る」

別に、もう一生会えないってわけじゃないのに、なんでこんなに胸が痛いんだろう。

電車の音が近づいてきて、一時間に一本しかない電車が、小屋みたいな駅に入ってくる。

この間はここで雪博にクッキーもらったんだよな。バニラ味の。

電車がホームに滑りこんできて、雪博が立ちあがる。

「じゃ、俺行くわ。野菜、できたら送ってやるよ」

「あ、うん。ありがと……」

僕は下手くそな笑顔を浮かべる。それからポケットに手を突っこんで、小さく折りたたんだ制服のネクタイを取り出す。

「これ……」

「俺のやったタイ？」

「違う。僕の。雪博がくれたやつは家にある。これは雪博が持ってた」

なにか交換したくて、でも言いだせなくて、僕は雪博から譲り受けた制服のネクタイと自分のネクタイを交換することにした。だって制服一式交換しても、雪博には邪魔なだけだし。

雪博は苦笑しながらも僕のタイを受け取る。

「俺、次んとこ学ランだって。言ったじゃん」

「そうだけど……いいじゃん、タイくらい邪魔になんないんだし」

「まあ、いいけど。別に」

電車の車掌がこっちを見てる。こいつらは乗るのか？ 乗らないのか？ みたいに。

雪博も気づいて、車掌に「乗ります」と声をかける。

「じゃ、また……」

雪博が右手を上げる。

「うん、また」

僕は雪博の手をパンと叩いて言う。

雪博が電車に乗りこんで、電車が動き出す。僕は思わず、その電車を追いかけていた。

ホームの端っこに設置してある錆びた金網にぶつかって、僕の旅は終わる。

僕の体を受け止めた金網が文句を言うみたいに僕の体をホームに押し戻す。

僕は錆びの浮いた金網を握りしめて、小さくなっていく電車を見つめた。車両はどんどんどんどん小さくなって、すぐに見えなくなる。

「……っ！」

金網を揺ると、棘が手に引つかかった。

「……痛てえ」

僕は掌を見つめる。中指の下に細く赤い筋が入っている。

「痛えんだよ……」

視界が滲んで、ホームのコンクリートに染みを作っていく。別の道を選択するってことは、共通の話題がなくなって、同じ話題で盛り上がれなくなって、感性や価値観みたいなものもズレてくるってことだと思う。小さい頃は仲がよかったのに、今は連絡も取らない、みたいなの。

そついうのを淋しいと思うのは今、だけなのかな。でも、それって辛いし淋しい。

ポケットで携帯が震える。

僕は涙を拭ってメールを開く。

雪博からだ。

『家帰ってオレの制服に顔埋めて泣くなよ、バーカ』

「……誰がそんなこと……っ」

僕は顔を上げ、どこまでも続く線路を睨みつける。この線路は雪博に続く道しるべなんだ。今はそう感じる。

共通のものがなくなっても、僕は僕で雪博は雪博なんだ。距離は遠くても、きつとどこかで繋がっていられる。さっきのメールみただい。

僕は叫ぶ。

「馬鹿野郎ー！ 絶対遊びに行つてやるからな！ 覚悟しとけよ、バーカーー！！」

涙を拭くと手がめっちゃくちゃ錆臭かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0415y/>

キミに続く

2011年10月30日02時18分発行